

---

# 熱砂の超巨大移動要塞ヴィーナス

ヒイロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

熱砂の超巨大移動要塞ヴィーナス

### 【Zコード】

Z1544Z

### 【作者名】

ヒイロ

### 【あらすじ】

不治の病にかかっていた少年が人体冷凍保存で未来へ・・・  
しかし、未来は過酷な世界になっていた。

少年はどうの生きていくのか！

アンドロイドあり、モンスターあり、そして男のあこがれ戦車あり  
！もちろん、ハーレムだって入れちゃいます！  
果たして、少年はいちゃらぶできるのか！

## プロローグ（前書き）

初めてなのでお手柔らかにお願いします。

## プロローグ

西暦2100年、在日米軍の度重なる不祥事に伴い日本政府は在日米軍の排除を決定する。

これを受けたアメリカが抗議行動を行うが、ある日本人の演説により反発運動が各地方で起つり、在日米軍を撤退させた。

撤退した基地は自衛隊の基地に再利用され軍事拡大を行うことに成功する。

在日米軍の排除を成し遂げる事ができた功労者の「不知火 大蔵」が軍部の最高責任者へ就任を果たす。

この物語は「不知火 大蔵」の息子である

「不知火 和也」が織りなすファンタジー・・・なのかな・・・

雪がちらつきはじめている季節の

とある病室で医師からある病気の告知をされている家族がいた。そう主人公の「不知火 和也」と両親である。

「あなたの病気は現代の科学では治療することができません。また、これから治療を行える可能性は極めて低いと思います」医師が沈痛な面持ちで話はじめた。

「息子は・・・息子は・・・まだ、18なのに・・・」

和也の母「佐代子」が涙を流しながらつぶやく

「佐代子・・・」

大蔵が佐代子の肩に手をおき慰めように引き寄せる。

「父さん、母さん・・・前からそうじゃないかと思つていたよ・・・ため息をつき、和也は話を続ける。

「大学を飛び級で卒業し大学院で博士号もとれた。

父さんの軍部で訓練と戦略、戦術も学ぶことができた。

濃密な人生だったと思う・・・それなりに良い人生だったよ・・・

明るい声で和也は話した

「和也・・・私は・・・私は・・・」

佐代子は興奮して話す。

「佐代子！落ち着きなさい！先生・・・家族だけにして頂けますか・

・

大蔵が佐代子に強く言いきかせる

「わかりました・・・私はナースステーション近くにいますので終わりましたら

お声をおかけ下さい」

医師はそういう、病室を出て行つた

「和也・・・よく聞きなさい。佐代子も興奮せずに最後まで聞くよう」

唐突に大蔵が語り始める

「私は軍部の最高責任者としてあるプロジェクトを行つている。いわゆる人体冷凍保存といわれるものだ」

「和也の病気は現在の医療では治せない。しかし、未来で治せる可能性があるかもしれない。私はこれに掛けたいと思つ。和也はどうしたい？」

和也は衝撃を受ける。確かに未来なら治せるかもしれない。でも・・・

「父さん・・・それは確実に治るかはわからないよね？」

「確かに可能性は低いかもしれない。でも、0%ではない。どうせ治らないなら

かけてみてはどうだろうか。佐代子はどうだろうか？」

「私は・・・私は・・・和也がずっと苦しむならば、それにかけたい・・・」

「母さん・・・俺の為に考えててくれる両親がいて本当にうれしいよ。

分かつた！父さん、俺もそれで生きる」とにかけたい！

「わかつた。先生には伝えておく。後で軍部のものがある施設に運ぶから

そこで行おう！準備は大丈夫か？」

「俺はいつでも平氣だよ！」

「では、すぐに手配を行う！佐代子は先生に連絡を」

「わかりました。先生には私から話を通します」

大蔵と佐代子は急いで病室を出て行つた。

病室に静寂が訪れたのもつかの間・・・ノックの音が聞こえる

「どうぞ・・・」

和也はノックを聞いて答えた

「失礼します。軍部から参りました、斎藤 正治と申します。

すぐに移動を開始したいんですが大丈夫でしょうか」

「俺は構いません。持っていくものもないですし、服もこのままで

良いのならば」

「問題ありません。では、ご案内します」

病室から病院の出口へと歩き始める。

「これから移動する場所は特殊施設になりますので

関係者以外は入れません。施設のものには触れないでください」

「わかりました。ここから近いのでしょうか」

「はい、入り口で専用の車があります。そこで投薬を行います」

「わかりました。」

病院の入り口に着くと大きなワゴン車が止まつていた。

「どうぞ、お乗りください」

正治はそういう、車の扉を開けて和也を中へ促した。

「わかりました。宜しくお願ひ致します」

和也は車に乗りこむと

「ああ、そうでした。これが例の薬です。水は横にあるので、お飲

みください」

「あ、わかりました。では・・・」  
和也は薬を服用し・・・そして意識がなくなつた

## プロローグ（後書き）

メタルサークルなどの設定が入りますが・・似ている世界観と設定と思っています。また、更新などは遅いと思います。要塞は・・次の予定です。

## 第一話「田代めたら美女?」（前書き）

すみません・・・駄菓子までいけませんでした。

まあ、ヒロインは出せたのでお許しいただければ・・・

# 第1話「目覚めたら美女?」

無人の廊下を靴の音が響く。

一や二と完成しました・・・

これがあれにアヌタの病氣も治ります」

口の元の赤い髪をしたアーリの長い美女が一歩やく

早く人体冷凍保存室に向かい蘇生を行いませんと

レ・ミゼラブル

れません

ପାଇଁ ପାଇଁ ପାଇଁ ପାଇଁ ପାଇଁ . . . .

「あ、ここです。毎日、寝顔を覗いていましたから、場所は絶対に忘れません。ああ・・・といひ・・・つぶつぶふふ」

人体冷凍保存室とプレートに書かれている部屋の前で

美女が怪しい微笑を浮かべる

アソコで一昔がアトマアドア用カドノ開く。

セーリング帆船の一部屋にも隠れてゐる

部屋の中央に一つだけガラス製のかぶせセルが安置されていました。

マスター、お目覚めの時間ですよ

美女はガラス製のかづせ川に近づくと中を覗き込む

ガラス製のカプセル近くにある透明なフレーム

何かを入力し始める。

「ああ、マスター……」

ガラスのカプセルから白い冷気が噴出し

静かに・・・静かにカプセルが開いていく。

「愛しのマスター、お目覚めください」

美女が怪しい微笑を浮かべガラス製のカプセルを見つめた。

カプセルが全て開ききつたと同時に男性が目を開いた。

「えつ・・・」には・・・」

男は目を覚まし上半身を起こした

「おはようございます。マスター」

「えつ、き、君はいつたい・・・」

美女の突然の挨拶に男性は驚きながら話す。

「申し訳ございません。私の名前はCIP-99型と申します。

和也様でよろしいでしょうか」

「えつ？確かに俺は和也だけど・・どうこう」と・・・

「私はアンドロイドです」

「あ、ああああ、アンドロイド？？えつと人間ではないということかな？」

どこからどう見ても、人間しか見えないんだけど・・・」

和也がCIP-99型を頭の先から足までを見る

「はい、私はアンドロイドで間違ひありません。

ですが感情回路が組み込まれておりますので

ほぼ人間と変わりはありません」

「えつ、感情回路？？」

「はい、人間と同じように喜怒哀楽ができるように組み込まれた回路です」

「でも、データ通りに動くだけでは・・・」

「いえ、データに基づいて表現されるわけではなく、  
人の生活でつかさどつたものとなります」

「なるほど・・・ってそれなら違うところはあるのかな？」

「人間と違うところですね。子供を生む事ができない事と  
身体能力や知性、記憶力などになります。戦略・戦術・戦闘など

人ではできない行動を行う事が可能です

「なるほど・・・でも、その名前じゃ呼びにくいやね・・・」

「CIP-99型つてや・・・愛称とかはないのかな?」

「マスター、申し訳ござりません。私にはそのようなものはあります。」

「そりなんだ・・・では、俺がつけてよいかな?」

「マスターが名前を下さるんですね。お願いたします」

「では・・・うーーん、アテネなんてどうだろう?」

「アテネですか・・・わかりました。これからアテネと名乗らせて頂きます」

アテネからピーーピーと機械音がなる。

「な、なんだ・・・」

「名前を頂きましたでマスター登録を行います。大変申し訳ござりませんが

マスターの粘膜を頂きたいと思います」

「え?..どうこう」・・・

和也が話している途中でアテネが突然顔をよせキスを行う

「なななな・・・なに!?!?」

「粘膜登録を完了しました。正式にマスター登録完了です」

「え、あ、へ・・・」

「突然で申し訳ございません。正式に登録を行うには

粘膜登録を行う必要がありました。キスが一番早く行えますので」

「そ、そりなんだ。で、でも、キスなんていきなり・・・その・・・」

「マスターとキスを行うのに躊躇なんてありませんよ。

マスターは和也様だけですから」

「そ、そうか・・・でも、びっくりするから」

「わかりました。今度からマスターに確認をとりキスを行いますね

アテネが怪しく微笑んだ

「い、いやそうじゃなくて・・・って、そつだー聞きたいことがある

んだけど・・・」

「はい、なんでしょうか？マスター」「

「あ、その前に、マスターは俺だけってどうしたことかな？」

「それはマスターがマスターだからです」

「え？ どういふこと？」

「それに関しましては、マスターの病気の治療を行つてからでもよろしいでしょうか」

「あ、とこいとは俺の病気が治るよくなつたとこいとかな？」

「はい、こちからを投薬すれば完治します。まずはこちからお飲みになつた後に

詳しいご説明を行いたいんですがよろしいでしょうか」

「わかった・・これで病気は治るのか。父さん、母さん、賭けにはどうせら勝てたらしいよ」

和也はそつづぶやきアテネから薬を受け取り飲んだ

「マスターその薬は即効性なので飲んですぐに効果ができると思います。

ですが、難点は眠くなる事です」

「え・・・ああ・・・だから・・・」

和也は薬を服用し・・・そしてまた意識がなくなつた

「お休みなさいませ・・・マスター・・・」

アテネが怪しく微笑んだ

## 第1話「田覚めたら美女?」（後書き）

ふむ・・・なんかよく意識がなくなる主人公になってしましました。  
誤字とかあるかもしませんが気にしないでいただけないとありがたいです。

12/6 修正

## 第2話「俺は一体何でここにいるんだ?」(前書き)

要塞の事は出せたんだけど、説明まではいけなかつた。・・・

## 第2話「俺は一体何で起きたんだ？」

「う・・・む・・・」

大きなベッドで寝ている和也が寝返りをうつた

「マスター・・・お目覚めですか?」

「う・・・えつ・・・あ・・・夢ではなかつたのか・・・」

和也は目を開きまわりを見渡した

「マスター・・夢から覚めていなければ?」

「マスター・・夢から覚めていなければ?」

アテネは怪しい微笑を浮かべながら和也の顔を近づけて・・・

「のわ! ! ! ア、アテネ! ! 起きた! ! 起きたから! !

もう大丈夫だよ! ! ほら! ! 目が覚めているからこんな事できる! !

あわてて和也はベッドから起き上がりジャンプしあげめる。

「チイ・・・そうですか。おはようございます。

マスター、体の調子はどうでしょうか

「えつ、今、舌打ちしなかつた? ?」

「何のことでしょうか。マスター・・耳は大丈夫でしょうか。

やはり精密検査を行いませんと。解剖とか必要でしょうか

「か、解剖! ! いやいやいや! ! 俺は元気だよ! ! まだ起きたばかり

りだから

寝ぼけただけだよ! ! うんうん、そうだよ! ! きっと

「そうでしたか。では、精密検査は今度にしますね

アテネは怪しい微笑を浮かべる。

「今度・・・いやいや、精密検査は良いから! ! 本当に! !

「分かりました。問題ないようでしたら良いのです。

ところで、体の調子は大丈夫でしょうか?」

「ああ、体のだるさなど特にないね・・・問題ないと思つよ

和也は腕を動かしたら首を動かしたりして答えた

「そうですか。見た限りでは問題なさそうですね。

では、マスター大変申し訳ございませんが  
脈を取らせて頂いてもよろしいでしょうか」

「ああ、問題ないよ。お願ひ」

アテネは和也の手をとり、脈を確認する

「マスターの脈を見る限りでは、健康そうですね・・・」

アテネは笑顔を和也に向けると同時に和也の手を自分の方に引っ張る  
「のわー！な、なにするん・・・」

アテネは和也の唇を自分の唇と合わせ、キスを行う

「う・・・んん・・・マスター、ご馳走様です。健康そのものです  
「な！なんでアテネはキスをいきなりするんだ！？」

「もちろん、マスターと愛を・・健康を確認するためには粘膜を  
調べる必要がありまして、申し訳ございません」

「えつ、今、愛をとかいわなかつた？」

「マスター、やはり耳が・・・解剖の準備を行いませんと」

「いやいやいや、アテネ！申し訳ない！空耳だつた！つん！  
空耳！！」

「そうですか・・・残念です・・・」

「アテネは俺を解剖したいのかい・・・勘弁してほしいんだけど・・・

「マスターを解剖したいわけではありません。

全てを受け入れたいだけです。そう、マスターの全てを」

「え、え、え・・・ま、まあ、なんだ・・・そ、そつだ！？」

「ここは、いつたいどこなんだい？」

「マスターに、ご説明を行つておりませんでしたね。

大変申し訳ございません。ここは、ヴィーナス内部、マスター専用室  
となります

「？？？ヴィーナス？？」

和也はアテネのいわれたことが理解できなかつた

「はい、マスター。超巨大移動要塞ヴィーナス、いわゆる軍事基地  
です」

「軍事基地・・・つまり、父さんの関係なのかな？？」「はい、お父上である、大蔵様のご命令で完成された、和也様の為の要塞となります」

「俺の為の？？いつたいどうこう事なんだ・・・父さんはどのように考えて俺にこのようなものを・・・いやいや、考えても仕方ないか。聞いてみればわかる事だしね。アテネ、父さんや母さんはどこにいるのかな？」

「大蔵様と佐代子様はお亡くなりになりました」

「えつ・・・どうこう事・・・父さんと母さんが亡くなつたなんて・

嘘でしょう・・・アテネ・・・」

和也はショックを受けつつもアテネに聞き返した

「申し訳ございません。大蔵様と佐代子様はお亡くなつたのは真実でござります」

アテネは悲しそうに和也の質問に答えてた

「そんな・・・じゃあ・・・俺はどれぐらい眠つていたの？？」

唚然としつつアテネに質問を返す

「マスターが人体冷凍保存をされてから2000年ほど立つてあります。

現在は西暦4100年となります」

「は？？え・・・つまり、俺は2000年眠つていて、そこまで薬が開発できなかつたということかな？？」

和也は唚然とした表情でアテネに問いかける

「はい、正確には薬の開発が行えない状態が続きまして、開発自体を後手にまわさないといけませんでした」

「開発が後手に・・・つまりイレギュラーな出来事が起つたと言う事か・・・」

「はい、マスターのご想像通り、ある出来事が起きたために後手にまわさないといけませんでした」

「ある出来事か・・・それは気になるな。

アテネ、いつたいどんな事が起きたんだい？」

「それは・・・・・」

アテネは2000年の間に起きた

驚くべき事実を語り始めようと口を開いた・・・

## 第2話「俺は一体何で起きたんだ?」(後書き)

次回は和也の寝ている間に起こってた事。  
しかし、和也のいちやらぶまで長い・・・  
早くハーレムにしたいのにな・・・

第3話「寝てる間になにがあった?」（前書き）

ふむ・・・説明は難しいですね・・・  
分子とかは流してくださいね・・・

### 第3話「寝てる間になにがあった?」

「マスターが人体冷凍保存をされてからすぐでしょ?」  
アテネは前置きのように言いはじめ続ける

「マスターもご存じのとおり、地球温暖化問題で  
二酸化炭素をどのように削減できるかを

各国の代表が集まり会議を行つてありました。  
しかし、削減の重要性をいくら訴えても

中国がそれを許さず、自国の要望のみを言い  
まつたく協力をに行ひませんでした」

アテネはため息を吐きながら続けた。

「しかし、日本人研究者『栗林 悟』氏が

ある研究を発表しました事により、

新エネルギーが開発されました」

明るい声でアテネが話す

「新エネルギー? それって温暖化となにか関係あるの?  
和也はアテネに問いかけた

「はい、これは二酸化炭素を使用したエネルギーです。

二酸化炭素を一つの器<sup>コア</sup>に閉じ込め

分子の活動を促すことによつてエネルギーを発生させます。  
詳しく述べますとこのエネルギーは分子を  
電気信号により活動を促し少しの信号で莫大なエネルギーを  
生み出す事に成功しました」

アテネは一度話を切る。

「このエネルギーの開発により二酸化炭素の活用法が生まれ  
大量に二酸化炭素のみを取り出す事で地球温暖化の抑制につながりました」

「なるほど・・・二酸化炭素のみ・・・酸素は外にだすのか・・・」

「はい、この画期的なエネルギーの開発で地球温暖化を抑制する事

に成功しました」

ここでアテネは和也と田をいつそう呟わせる

「栗林氏の研究で発見されたエネルギーであるこれを

『永久ドライブ・栗林』 通称『EDK』となすけれども

これにより全てのエネルギーを

EDKに切り替える事が各首脳会議で決定されました

アテネは下を向いて話し続ける

「しかし、安易に永久的にエネルギーを生み出すことができる  
EDKが開発された事により、各国で利権争いが勃発する事になりました。

また、この時期に以前から進められていたandroイド開発の目処  
が尽き、

エネルギーを小型化できるEDKを搭載させる事で起動に成功しました」

アテネが笑顔を浮かべた

「しかし、androイド開発が成功したことで

大規模な世界戦争が行えるようになり

各国でandroイド同士での戦争が行われるようになりました」

「そんな中でandroイドを大量にかつ遠隔に操作する為に

アメリカの研究者リストインが発明した

androイド遠隔装置と人工知能を兼ね備えた、

ジャステイスが発明された。

ジャステイスの導入によりアメリカが一挙に戦闘地域を広げていきました」

アテネは悲しそうな声を出しながら続ける

「アメリカはさらに戦闘地域を広げようとしたところ

ジャステイスがその判断を否定し独自の行動を行いました」

「ジャステインは人間がいるかぎり地球は守られないと  
判断を下し、androイドで人を攻撃しはじめました。

そうですが、暴走を始めたのです」

「ジャステイスを破壊する為にアメリカ軍部が動き出したが  
人型アンドロイド以外に殺人マシン・バイオ兵器・生体兵器などを  
ジャステインが開発し生産し始め、それで抵抗をはじめた為、  
アメリカ軍部の作戦が失敗に終わりました」

「ジャステスはこれを機に衛星を通じて

各首脳国のコンピュータに侵入、コピーを行い

地球上の人間に對して攻撃をはじめました」

「この暴走により人類の50%が死に絶え

生き残れた人類はジャステイスに侵入されていない  
コンピューターや兵器を使用しなんとか拠点になる  
生存圏を守る事ができました」

「その拠点であるシティを安全に行き来できるように

また、ジャステイスが生産している敵に対抗するために  
ハンター協会が設立されました」

「ハンター協会か・・・どこでもあるのかな?  
というか・・・ゲームみたいな・・・」

「はい、そうです。確かにゲームみたいですが眞実です。

ハンター協会は各シティにありますが、

主に護衛やモンスター・危険性が高いモンスターに賞金を  
かけてそれを討伐する事でゴールドを得る仕事となります  
「なるほどね・・・」

「以上が世界情勢となります。現在はハンター協会で  
シティは守られていますが、いつジャステイスが  
動くかわからない状態です」

「ジャステイスか・・・なるほど・・・流れは大体わかつたんだけど  
肝心の今乗っているヴィーナスの事が語られていないんだけど」  
「もちろん、これからですよ。マスター、せつかちは女性にはモテ  
ませんよ」

「ほつといてくれ!」

アテネは微笑を浮かベヴィーナスの事を語り始めようとさらに話を

続けようと口を開いた

第3話「寝てる間になにがあつた?」(後書き)

世界情勢はかけたかな・・・

つぎはやつと要塞だ!!

ヴィーナス!!はやく・・・ハーレムにしたい・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1544z/>

---

熱砂の超巨大移動要塞ヴィーナス

2011年12月7日22時48分発行